

TIA と脳卒中

Sarah T. Pendlebury, Matthew F. Giles,
Peter M. Rothwell ●原著
水澤 英洋 ●監訳

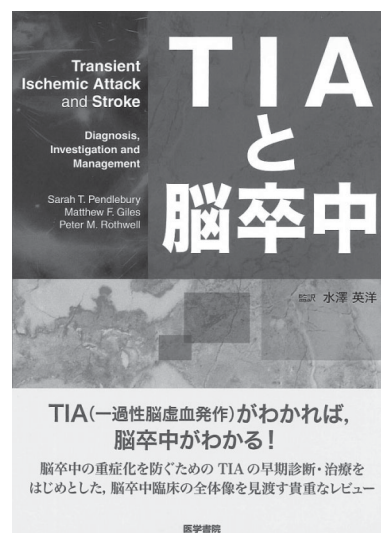
国立循環器病センター名誉総長/日本脳卒中協会理事長 山口武典

Sarah T. Pendlebury と Peter M. Rothwell 夫妻、それに臨床疫学者 Matthew F. Giles の3人による『TIA と脳卒中』の日本語版が、このたび東京医科歯科大学神経内科グループ（水澤英洋教授監訳）によって出版された。著者の一人である Rothwell 教授は、さまざまなメタ解析で有名なエディンバラの Charles Warlow 教授の下で研究を続け、その後オックスフォードに移って Oxford Vascular Study (OXVASC) を立ち上げた。その後の活躍は目覚ましく、極めて多数の脳卒中の臨床および臨床疫学に関する研究成果を報告している。中でも最近注目されているのが、「TIA（一過性脳虚血発作）を早期に治療することによって、3カ月後の転帰が著しく好転する」という OXVASC の臨床成績である。TIA が脳梗塞の警告症状であることはかなり以前（1950年代）から言われてきたにもかかわらず、一般臨床家の間ではあまり重要視されてこなかった。本書の表題に TIA という言葉を付けていることは、この点を意識しての命名であろう。

TIA と脳梗塞は一連の病態であるので、その定義あるいは診断基準

を定めることは極めて難しい。最初に米国で定められた定義は「24時間以内に症状が消失し、脳に器質的病変を残さないもの」とされているが、最近の画像診断の発達によって症状持続時間と画像上の変化による定義付けは困難との考えから、米国心臓協会（AHA）/脳卒中協会（ASA）では「持続が短時間で画像所見を残さない」というあいまいなものとなっている。しかし、本書では最も古典的な「24時間」という定義を採択しているため、われわれにとっては親しみやすい。ちなみに厚労科研による研究班（班長：国立循環器病研究センター峰松一夫副院長）でも、現在のところ24時間という定義を用いることを提言している。

本書では脳卒中患者での血管検査の重要性を強調しており、非侵襲的検査だけに頼りすぎて脳動脈瘤の存在を見逃す危険性、頸部の頸動脈の評価における duplex 超音波検査の有用性など、単なる検査法の羅列ではなく具体的に評価がなされているのがあるがたい。中でも、頭蓋外の頸動脈病変に対する血栓内膜剥離術の問題を具体的に提示していることは極めて有用である。



これまでの（特に日本の）教科書にない内容も少なくない。中でも虚血性脳卒中を「TIA・軽症脳梗塞」と「重症脳梗塞」に分けて記述していること、いろいろなリスクスコアを用いた「予後の診断法」について極めて実用的な解説がなされていることは新鮮である。また、「治療法の評価方法」の項は圧巻である。大規模臨床試験での無作為化の必要性をさまざまな角度から解説し、またその臨床試験で得られた結果の解釈に当たっての注意点を細かく述べている。著者らの経験と信念を如実に表しており、本書のハイライトであろう。

高血圧性脳出血に関する記述が少くないという難点はあるが、上に述べた数々の素晴らしい内容を考えて、ぜひとも座右の書として（バッグに入れて持ち歩きも可能）備えられることをお勧めしたい。

B5 頁 384 2014年
定価：本体 8,000 円＋税
[ISBN978-4-260-01523-3]

医学書院刊